第二反抗期尺度の作成および親の養育態度との関連

○杉山宙¹・長谷川孝治²

(¹東京大学大学院教育学研究科・²信州大学人文学部)

キーワード：反抗期，思春期，親子関係

Development of a Second Rebellious Phase Questionnaire and its Relation with Parental Bonding

Hiroshi SUGIYAMA¹, and Koji HASEGAWA²

(¹Graduate School of Education, The University of Tokyo., ²Faculty of Arts, Shinshu University)

Key Words: rebelliousness, adolescence, parent-child relationship

目 的

思春期の子どもが、親や周囲への特有の反抗的態度を示す時期は、幼少期に生じる第一反抗期に対して、第二反抗期と呼ばれている。第二反抗期は、家庭内不和や反社会的行動などとの関連も報告されており、その明確な生起要因を特定することは、思春期の健全な発達のためにも重要であると考えられる。しかしながら、第二反抗期の生起要因については、古くから、親からの自立欲求に対する正常で必然的な反応である (Freud, 1936) とされてきた一方で、実際に第二反抗期の生起要因について、実証的に検討を行った研究は少ない。

白井 (1997) は第二反抗期を、青年が親の保護の下から離れ大人となろうとする欲求の表れであり、思春期青年の健全な発達のための必然であるとする伝統的な考え方を「分離モデル」と名付け、それと対比する形で、比較的近年の新しい考え方として「組み替えモデル」を提唱した。「組み替えモデル」においては、第二反抗期は必ずしも青年の発達のための必然ではなく、むしろ青年の自立の欲求に対して、親が適切に家族システムを組み替えることができなかったことから生じた結果なのだとされている。そこで本研究では、家族システムの重要な一要素といえる、親の養育態度という観点から、第二反抗期との関連を検討し、上記の2モデルについて検証することを目的とする。

親の養育態度についての尺度としては、Parker ら (1979) の Parental Bonding Instrument が一定の評価を得ている。PBI では、親の養育態度を、「Over Protection (過保護)」と「Care (養護)」の2次元から測ることができる。上記の2つのモデルでは、共に第二反抗期の生起要因として、親からの自立欲求をあげているため、親の子どもに対する過干渉の程度を示す「過保護」傾向が高いことは、子どもの自立欲求を高めると考えられ、第二反抗期との正の関連が想定される。一方で、「組み替えモデル」では、家族システムの適切な組み替えによって、第二反抗期が抑制されることを示唆しているため、親の子どもへの愛情や援助の程度を示す「養護」傾向が高いことは、子どもの自立欲求に対する適切な対処の可能性を示唆するため、第二反抗期との間に負の関連が示唆される。

方 法

本研究では、まず心理学を専攻する大学生 12 名によるブレインストーミングで出された、「第二反抗期に発生する行動、感情」を、発表者が分類し、尺度項目としてまとめた。第二反抗期尺度を暫定的に作成した。そして、調査参加者が中学生になるまでの両親それぞれの養育態度をたずねる PBI-BC 日本語版 (藤野, 2007) と、自身に反抗期があったと思うかをたずねる「反抗期自己認知」1 項目と共に、大学生 350 名に配布し、有効な回答を得られた男性 171 名、女性 123 名 (平均年齢 19.17 歳) を分析の対象とした。

結 果

まず、得られた結果から極端なフロア効果が見られた項目を削除し、第二反抗期尺度を因子分析 (主因子法・プロマックス回転) した結果、20 項目の 1 因子構造が抽出された。その際の Cronbach の α 係数は.92 と十分な値が得られたため、これを採用した。次に、第二反抗期尺度の弁別的妥当性の確認のため、反抗期の自己認知あり群となし群に二分し、第二反抗期尺度得点の平均値の差を対応のない t 検定によって検討した ($t(293) = 8.517, p < .001$)。その結果、0.1 パーセント水準で有意な結果が得られ、反抗期あり群 ($M = 2.41, SD = .51$) は、なし群 ($M = 1.91, SD = .47$) よりも、第二反抗期得点が高いことが示された。このことから、第二反抗期尺度の弁別的妥当性は確認されたといえる。

最後に、性別と両親の養育態度を独立変数とし、第二反抗期尺度得点を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、各偏回帰係数は有意であり、両親共に、過保護的であることは第二反抗期を促進し、養護的であることは第二反抗期を抑制する可能性が示唆された。

Table1. 反抗期の重回帰分析 (β)

第二反抗期	
性別	.12 *
父親養護	-.23 ***
父親過保護	.57 **
母親養護	-.05 *
母親過保護	.06 **
R^2	.22
F	16.31 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

考 察

分析結果から、両親の過保護的養育態度が第二反抗期を促進し、両親の養護的養育態度が第二反抗期を抑制するという、白井 (1997) の「組み替えモデル」を支持する結果が示された。この結果は、家族システムへの適切な対処により、第二反抗期を抑制できる可能性を示唆しており、思春期の問題行動を抑制する適切な介入法を今後の研究で模索していく必要があると考えられる。

引用文献

- Freud, A. (1936). Das ich und abwehrmechanismen. *Internatinaler Psychoanalytischer Verlag*. (外林 大作 (訳) (1985) 自我と防衛 誠信書房).
- 藤野京子 (2007). 児童虐待等の被害経験が成人期女性に及ぼす影響に関する研究.『平成 17 年度～平成 18 年度科学研究費補助金 研究結果報告書』.
- Parker, G. Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *Journal of British Medical Psychology*, 52, 1-10.
- 白井利明 (1997). 青年心理学の観点からみた「第二反抗期」. 心理科学, 19, 1, 9-24.